



2025年（令和7年）
1月号（No. 956）

公益社団法人
日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価1部 150円

会員の会報購読料は年会費に含まれています

URL ● <http://www.jac.or.jp>
e-mail ● jac-room@jac.or.jp

年頭所感 ■ 創立120周年を迎えるに当たって

あるべき姿は「みんなの日本山岳会」 理念が つなぐ山と人、そして未来

日本山岳会会長 橋本しをり

今秋、日本山岳会は創立120周年を迎えるが、多様化する社会や登山界を背景に、連綿と築き上げられてきた山岳文化という財産をいかに次世代に引き継いでいくべきか。節目の年に当たり、改めて本会の目的に沿って理念を明文化することにより未来への方向性を示していきたいという、橋本会長からのメッセージ。

創立120周年を迎えるJAC
日本山岳会は、明治38（1905）年に設立された日本最初の山岳クラブであり、今年、10月14日に創立120周年を迎えます。

日本山岳会が築き上げてきた山岳文化の財産は非常に豊かであり、これを次世代に引き継ぐ責任があります。創立以来の精神と歴史か

ら学びつつ、現代の登山環境に適応し、新時代にふさわしい登山文化の創造や充実したクラブライフの環境づくりが求められています。また、女性会員への支援や、Z世代の若い会員の意識向上に向けたインフォメーション・テクノロジー（IT）の活用、持続可能な開発目標（SDGs）に代表される環境問題への取り組みも重要な課題で

目次

あるべき姿は「みんなの日本山岳会」 理念が つなぐ山と人、そして未来……1
ネパール西部・ドルポ地方 サンクチュアリ・ピーク初登頂……4
先人たちの足跡をたどって インド・ヒマラヤを横断……7
山の名著再読……10
2024年ピオレドール賞 授賞式をイタリアにて開催……12
活動報告……13
図書紹介……15
新入会員……15
会務報告……17
ルーム日誌……17
会員異動……18
編集後記……19

▶ 日本山岳会事務局（含図書室）取扱時間
月～金……10～20時
第1、第3、第5土曜日……10～18時
第2、第4土曜日……閉室



2024年2月、蔵王山・地藏山付近にて

す。

これらの多岐にわたる活動を発展させるためには、組織としての一貫性を保ちつつ、時代の変化に柔軟に対応することが欠かせません。そのために必要なのが、山岳を愛し、探求し、社会に貢献するという日本山岳会の理念を支えるビジョン（Vision）、ミッション（Mission）、スローガン（Slogan）の枠組みです。

JACの理念づくりの必要性

日本山岳会の目的は、定款第3条に記載されているように、「山岳に関する研究、知識の普及および健全な登山指導、奨励をなし、あわせて会員相互の連絡懇親をはかるとともに、登山を通じてあまねく体育、文化ならびに自然愛護の精神の高揚をはかる」ことです。

これまで本会は、この目的の達成とその維持を目指して活動してきました。しかし、定款第3条は本会の活動とその方向性を「目的」として明文化したものであり、会が目指すべき具体的な「あるべき姿」、すなわち「理念」を示したものではありません。理念を明文化することで、以下のような利点が期待されます。

①Unity（一体感） ②Camaraderie



2024年5月、熊野古道集中山行で熊野本宮大社の旧社地・大斎原に集合した本会会員たち。次回は国東半島へ

意思決定がよりの確になります。
③外部へのアピール

理念に基づく行動や発信により、社会からの信頼を得ることで、日本山岳会の社会的評価を高めることが期待されます。

これからのJACの指針に

「日本山岳会はなんのために存在するのか」「日本山岳会の存在意義や使命」といった問いに答える形で基本的な価値観を示し、日本山岳会の新たなステージを切り開きたいと考えます。120年にわたる本会の歴史を踏まえ、また、未来の本会の姿形を見据えながら、私たちが進むべき方向性と目指すべき山頂を明確にしました。

(仲間意識)の形成
共通の理念を理解することで会員が同じ方向を向き、一体感や親近感が生まれます。
②価値観と判断基準の共有
理念を定めることで、会員間で価値観や判断基準が形成され、会務の優先順位がつけやすくなり、

■スローガン「みんなの日本山岳

会

日本山岳会は、山岳を愛し、探求し、社会に貢献する志を持ち、ボランティア精神に富んだ会員が集う組織です。現在、33支部が連携し、登山初心者から世界の高峰登山隊メンバーまで、そして若者から中高年、女性を含む幅広い層が参加する、多様性に富んだ会となっています。このような背景を踏まえ、「みんなの日本山岳会」をスローガンに掲げました。

このスローガンには、多様性を重視し、一人ひとりが自分らしく活躍し、互いに支え合い、助け合いながら成長できる組織でありたいという願いが込められています。「みんなの日本山岳会」は、会員が日々の行動や意思決定を進める際の指針となるだけでなく、組織の精神的支柱やエッセンスを凝縮した短いフレーズであり、いわばマントラ(Manttra、真言)としての役割を果たします。

■ビジョン「すべての人に山の楽しさを」

ビジョンは、本会の目標や将来の姿をイメージとして表現した言葉です。「すべての人に山の楽し

さを」というビジョンには、週末の山行や挑戦的な登攀はもちろん、日々の暮らしの中でも「山の楽しさ」を会員だけではなく、社会の人々に味わってもらいたいという願いが込められています。
このビジョンは、山行のときだけでなく、定款第3条に掲げられた目的を達成する際にも意識してもらいたい価値観です。「すべての人に山の楽しさを」を常に念頭に置くことで日本山岳会の活動が一貫性を持ち、社会に貢献するための指針となることが期待されます。

■3本のミッション

ミッションは、社会において日本山岳会がどのような存在であり、どのような価値を提供するのかを明確に示すものです。これは、本会と社会との関係を定義するとともに、定款第3条に掲げられた目的を实践することで社会に提供できる価値を具体化したものでもあります。

①会員による充実したクラブライフを

日本山岳会は、山を愛する人々が集い、趣味として山を楽しむ場

日本山岳会の理念

スローガン

「みんなの日本山岳会」

ビジョン

すべての人に山の楽しさを

ミッション

会員による 充実したクラブライフを	挑戦的で創造的な 登山の実践と支援	山を通して 人々の心を豊かに
----------------------	----------------------	-------------------

ストラテジー（事業戦略）

安全登山の啓発推進	山岳文化の伝承普及
山岳環境の保全保護	多様化する登山者層へのサポート

ストーリー

- 山を知り、山を大切に、山の魅力を感じよう
- 山登りを、仲間と一緒に、生涯を通して楽しく続けよう
- 山登りを安全に楽しむために、自立した登山者になろう

2024.3.14

所です。このミッションは、会員同士の交流や活動を通じて、クラブライフを充実させることを明確にしたものです。

② 挑戦的で創造的な登山の実践と支援

日本山岳会は、挑戦的で創造的な登山を推奨し、それを支援することを目指しています。このミッションは、会員が新しい登山の形を追求し続けることを支援するものです。

③ 山を通して人々の心を豊かに

日本山岳会は、山岳文化活動、社会貢献活動、自然保護・保全活動を通じて、会員および一般の人々の心を豊かにすることを目指しています。このミッションは、山を介した社会とのつながりを深めることを目的としています。

■ 本会の事業の方針や計画

ストラテジー（事業戦略）とは、本会の目的を達成するために行う事業と、その基本的な方針や計画を指します。公益社団法人とし

て内閣府に提出している事業区分（Ⅰ．登山振興事業、Ⅱ．山岳研究調査事業、Ⅲ．山岳環境保全事業、Ⅳ．会員向け事業）を整理し、以下のように具体化しています。

① 安全登山の啓発推進

登山教室や登山道整備、山の天気予報の提供など、登山の安全を促進するための事業を展開します。

② 山岳文化の伝承普及

写真展や絵画展などの開催、山岳祭の普及活動、山岳古道調査プロジェクトなど、山岳文化の伝承と普及に向けて取り組みます。

③ 山岳環境の保全保護

森づくり活動、動植物の保護、生態系の再生、自然観察会、清掃登山など、山岳環境の保全や保護、啓発に取り組む事業です。

④ 多様化する登山者層へのサポート

障がい者支援登山や子ども向け登山教室、高齢者登山など、多様な登山者を対象にサポートを行ない、幅広い層に山の魅力や価値を伝えています。これにより、心豊かな日々を山とともに楽しんでいただけるよう努めています。

⑤ 会員のための事業推進

会員を対象にした様々な取り組み

みを行なっています。これらには、会員向けの山行や講習会、文化活動や自然保護活動、会員や支部相互の交流・懇親、情報発信、山岳保険の斡旋、上高地山岳研究所の開放などが含まれます。

■ 3本のストーリー

ストーリーは、物語として理念を分かりやすく示し、会員の日常の行動指針として作成されたものです。

■ 新たなスタートとして

創立120周年を迎える本会は、持続可能な運営に向けた課題や、高齢化社会に伴う会員構成の変化と、それに応じた活動の活性化の必要性に直面しています。しかし、今回作成した理念に基づき、新たな形での東京支部の設立や、停滞していた国際交流の再開など、本会には新たな可能性が広がっています。

日本山岳会は、山を愛する仲間が集う団体です。このたび作成した理念を指針に、会員の皆さまが実り多く、楽しいクラブライフを過ごしていただけるよう願っております。

REPORT

ネパール西部・ドルポ地方
サンクチュアリ・ピーク初登頂

ヒマラヤキャンプ隊 松本歩美

ヒマラヤキャンプは、海外経験やヒマラヤ登山などの経験の少ない20代から30代がヒマラヤの未踏峰を目指す若手育成プロジェクトであり、2015年から実施されている。

今年度、我々はサンクチュアリ・ピークという6207mの頂に初登頂した。メンバーは花谷泰広プロジェクト・リーダーの下、松本歩美(チーム・リーダー)、長谷川陽央、畠山愛以、平塚雄大の5人パーティである。

2023年の暮れ、我々は登る山を選ぶために話し合いを重ねていた。サンクチュアリ・ピークはネパール西部のドルポに位置する。地図で見ただけでも人里離れたヒマラヤの奥地であり、名前のとおり「聖域」のように見えた。この隔絶された地域にそびえる頂を目指すことにした。このエリアは1970年代前半から日本隊が入っており、多くの主要なピークが登られてきた。我々が目指す山が存在

カトマンズからカンジロバBCへ

我々は9月25日、ネパールのカトマンズに到着した。次の目的地である西ネパールのネパールガンジ(実際の泊地はチンチュウ)を経由し約800km、飛行機で移動する方法もあったが、予定どおりフライトされないことも多いため悪路での長距離バス移動を選択した。

雨季が終わる時期だが、現地は世界的な異常気象の影響か記録的豪雨に見舞われていた。現地のテレビには川が氾濫し被災する様子や、土砂崩れによりバスが埋まっている様子が映し出されていた。この状況では、いつカトマンズから出発できるか分からなかった。

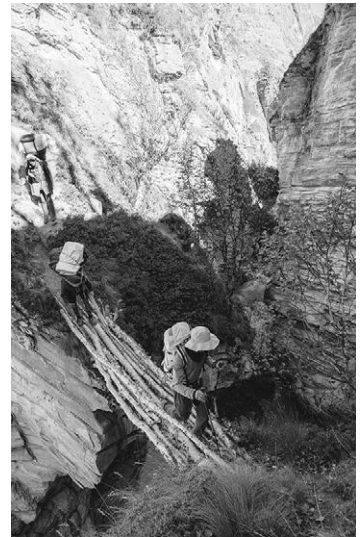
そんななかエージェントから西ネパールからのバスがすぐそこまで来ている、と知らされた。我々の目的地からこちらに向かって来

ているのであれば、同じ道を通って西ネパールまで行ける可能性は高いはずだ。なんとか予定どおり10月1日にカトマンズを出発できた。

想定外の車中泊を含む3日間のバス移動を経て、トリプラコットに到着

した。ここから先はジープと徒歩で約20km西の、最後の人里であるフリコットへ移動した。キャラバンが始まってからも多くの想定外の事態に直面した。まずは計画していたルートが進めないことが分かる。

2泊目の夜、翌日以降のルートについて話していると、現地ポーターは我々が進もうとしている「カンジロバ・サンクチュアリ・トレック」が「危険で進めない」と話している。道中には約5300mの峠越えがあるが、その峠を越えた北面には氷河が残っており、登山装備を持たないポーターたちは通過できない。代わりのルートとして、現地ポーターのリーダー格であるシリラルは、元のルートとは全く異なるルートとして「次は

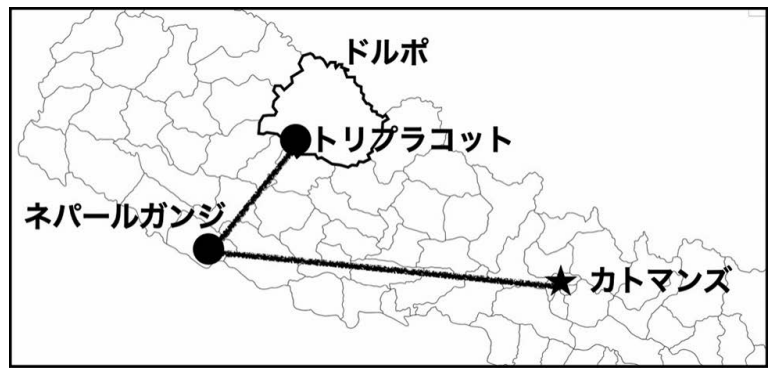


ゴルジュに架かる木橋を恐る恐る渡る

トリパルタだ」と言う。詳しく尋ねようとしたが、彼は地図が読めないから示すことができなかった。判断するすべがないまま話し合いが続いたが、結局、彼の案内に身をゆだねることとなった。

それ以降は暗中模索の毎日を繰り返すこととなった。変更後のルートは、当初予定していた5300mの峠を東側から大きく迂回する、ジャガドゥラ川という川沿いをひたすら進むルートであった。ただ、回り込む先はどう見ても大岩壁であり、到底突破できるとは思えなかった。すると、谷の方に進路を取り300mほど急斜面を谷底に向かって下降し始めた。その先には険しいゴルジュがあり、よく見ると橋が架かっていた。その橋は、落ちたら命を落とすであろう深く大規模なゴルジュに

架けられており、高い部分にダケカンバの丸太を渡しただけのものであった。渡った先にも岩壁に掛かったダケカンバの梯子があり、こちら頼りない木を寄せ集めて細い針金で束ねてあるのみで、いつ壊れてもおかしくない。近くにタルチョ（祈禱旗）が掛かっており、地元民が通るルートであることが伺えた。



カトマンズからドルポ地方への移動経路(チャーター・バスで3日間)

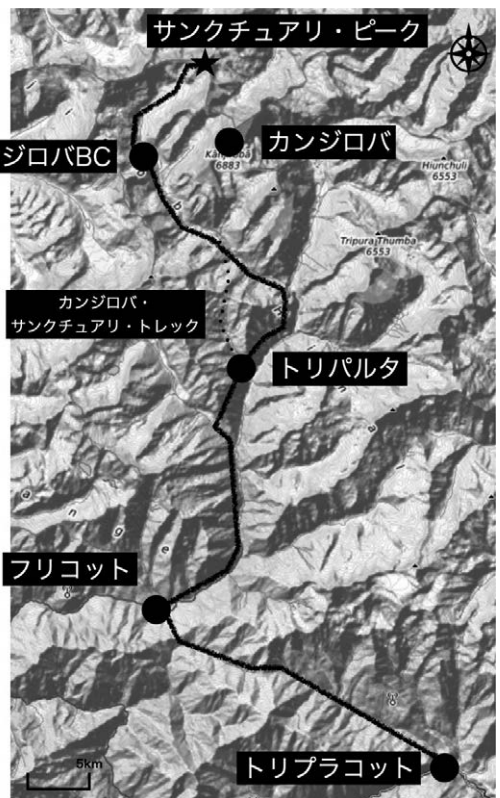
地元民は、冬虫夏草という漢方や薬膳料理、中華料理などの素材として高く売れるキノコの一種の採集のため、このルートからカンジロバBCに通うそうだ。私は信じられない気持ちと、なんて逞しいのだろうと思った。危険箇所では、彼らのためにロープを使ってルート工作や荷上げの補助をしたが、彼らの一部は手助け不要とばかりにスタスタ進んで行くのであった。どんどん奥地に入って行き、後戻りできない様子となっていた。

そうして7日目の10月13日、ついに登山の拠点となるカンジロバBC付近に到着した。地元民はこの場所を「エアポート平原」と呼んでいたのだが、確かに壮大な草原、中央に流れる川、周囲は白い氷河を抱いた6000mの峰々に囲まれた、絶景の地であった。我々は標高約4600mのここにBCを設営した。ポーターたちは荷物を届けると引き返して行き、奥地には我々とスタッフの計8名だけが取り残された。

サンクチュアリ・ピークへ

BCに到着してから1日レスト

して、翌15日から登山活動を開始した。まずは偵察だ。BCからさらにジャガドウラ川を遡行して行けばピークが見えてくるはずだ。キャラバンの最中は、川沿いに毎日4000m前後でキャンプしてきたため自然と順応できていたようで、メンバーの体調は良好だ。BCから2時間少々河原を進むと、ついに地図で眺めていたサンクチュアリ・ピークが見えた。記録で見た、白く美しい三角形のピークはまだ小さく、はるか遠くに見えた。次第に氷河に堆積したモレーンのガレ場に突入して行く。



カンジロバBCへのキャラバン・ルート図

氷河の取付が見える位置まで進み、上部キャンプ地のおおよその位置を検討した後、一部の荷物をデポしてBCへ戻った。

翌日はレストし、翌々日からサミット・プッシュユることにした。早々にサミット・プッシュユにかかった理由は、ネパールの祝日であるティハールのために、バック・キャラバン開始日を予定よりかなり早めねばならなかったためである。また、この数日を逃すと、20日以降は降雪のある悪天となる可能性があった。そのため17日から山頂を目指した。



「聖域」の名にふさわしいたずまいのサンクチュアリ・ピーク。右が頂上

m付近でクレバス帯を抜けた。この時点ではまだピークは目視できない。この日は3時間進んだことで引き返し、午後は体を休め、翌日深夜よりサミット・プッシュすることとした。

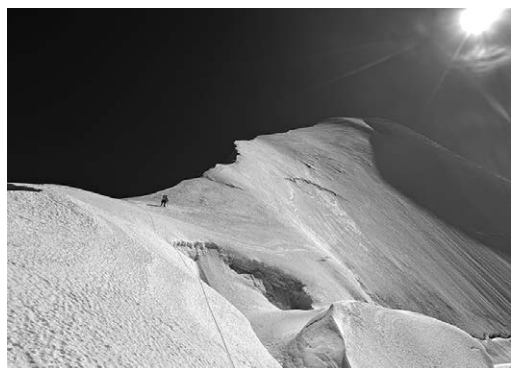
次の19日、午前3時半にキャンプ地を出発。ここから山頂までは標高差約1000mだ。前日に立てた赤旗を目印にクレバス帯を順調に進み、昨日の到達地点に到着。その先は長い雪原地帯となり、軽いラッセルとなり、腰から膝下程度の、な

れる特有の雪質らしい。

サミット・プッシュに入ってから毎日標高を上げていたためか、花谷以外のメンバー4名は体の動きが悪くなっていた。だが、このタイミングを逃すわけにはいかない。稜上は畠山と私がリードして2ピッチで山頂まで進もうと話したが、出発してから全然ロープが伸びない時間が続いた。時間も押してきたためリードを花谷に代わり、6ピッチで西稜の終点まで進んだ。そして、10月19日12時30分ごろ、ついに全員で6207mの頂に立つことができた。山頂は雪庇か地面か境目が分からない狭い場所、足元の雪を切って立ち、全員で喜びを分かち合った。ついに我々はジャガドゥラ川を進んだ、最奥の聖域に到達したのだった。

登山を終えて

今回、全員で未踏峰の山頂に立つことができたことは、何ものにも代えがたい喜びであった。最後になるが、この山行を実現するためにいただいた多くのご支援と、日本でサポートしてくれた仲間や協力者の皆様へ心から感謝を述べたいと思う。また、このような機



山頂へ続く最後の稜線を6ピッチ進む

会をくださった花谷プロジェクト・リーダーにも感謝したい。ありがとうございました。

やはり山は行ってみないと分からない。今回の登山では、語り切れないほど多くの体験や経験があった。大きな悔しさもあった。これら全てを糧にして、次につなげていきたい。

ヒマラヤとは、ネパール語で「雪の山」の意味だという。我々は、これからも山をやっていききたいと思う。



オウゴン

まずは上部キャンプ設営のため荷上げを行ない、偵察で確認していた5200m付近の氷河の取付手前、モレーン上にキャンプを設営した。翌18日は、サミット・プッシュに向け氷河上を歩いて偵察し、ルート決めを行なった。クレバスを回避しながら登高ルートを決め、赤旗を立ててルートを確認した。心配していた大クレバスによる行き止まりもなく、5500

しかし、初めて踏み入る標高で息が上がり、体は思ったように動かない。そのころに、ようやく目指すピークを再び目視することができた。雪原を抜け、約6000mあたりから三角のピークの左側（西側）にラインを取った。この最後の雪稜は、支持力のないサラサラ、スカスカしたシュガー・スノーで、雪庇が西側に張り出していた。これがヒマラヤや高所に見ら

創立120周年記念事業

グレート・ヒマラヤ・トラバース／ステージVI(上)

先人たちの足跡をたどつて
インド・ヒマラヤを横断

重廣恒夫

インド・ヒマラヤ横断は、踏査計画立案でずいぶんと苦労した。1936年に行なわれた、日本最初のヒマラヤ登山隊による東部ガルワールのナンダ・コット(6861m)初登頂は別格として、この地域だけでも75年の日本山岳会学生部によるドゥナギリ(7066



ナンダ・デヴィ東BCから見た東峰(左)と主峰(中央)

m)の北稜からの登頂、翌76年の日本山岳会とインド陸軍との合同によるインド・ヒマラヤ第2位の高峰ナンダ・デヴィの縦走、同時期に行なわれた戸田直樹隊によるチヤンガバン(6864m)南西岩稜からの登攀、75年の上市峰窓会隊が初登頂したカラシカ(6931m)には2008年にGIRI BOYSインド・ヒマラヤ登山隊がアルパイン・スタイルで北壁の初登攀(同年ピオレドール受賞)をしている。

また、中部ガルワールには76年日本(山岳会)・インドの女子合同登山隊がアビ・ガミン(7355m)に登り、2008年平出和也・谷口けいこのペアがカメット(7756m)南東壁を初登攀(同年ピオレドール受賞)している。そのほかにも西

部ガルワールのニルカンタ(6596m)、サトパント(7075m)、バギラティ(6856m)、シブリン(6543m)など一度は見てみたい山々があった。

さらに古くから日本隊が訪れたスピティ・キンナウル山群、ラダック・ザンスカール山群や、初めての日本女性隊が登ったラホール山群のデオ・ティバ(6001m)など登ってみたい山もあった。しかし、訪れてみたい山を結ぶと150〜200日前後の日数がかかり、根本的な見直しを迫られた。

また、48年前のナンダ・デヴィ縦走後に行なったキシトワール、ヌン・クン山群の踏査地も、1990年ごろからパキスタンとの国境問題で同地域への入域が難しいことや、降雪により峠越えに支障をきたすことも予想され、最終的に以下のような行程になった。

- ◆ガルワール・エリア踏査(ナンダ・デヴィへの東・西からの接近)
 - ◆ヒンズー教の三大聖地巡り
 - ◆ダラム・サラ訪問とカレリ渓谷トレッキング
 - ◆ラダック踏査(カンヤ・ツェII峰(6240m)登山)
- 期間…2024年10月1日〜11

月25日

メンバー…重廣恒夫(77)、吉井修(63)、飯田邦幸(70)、中村三佳(61)

48年ぶりのナンダ・デヴィ

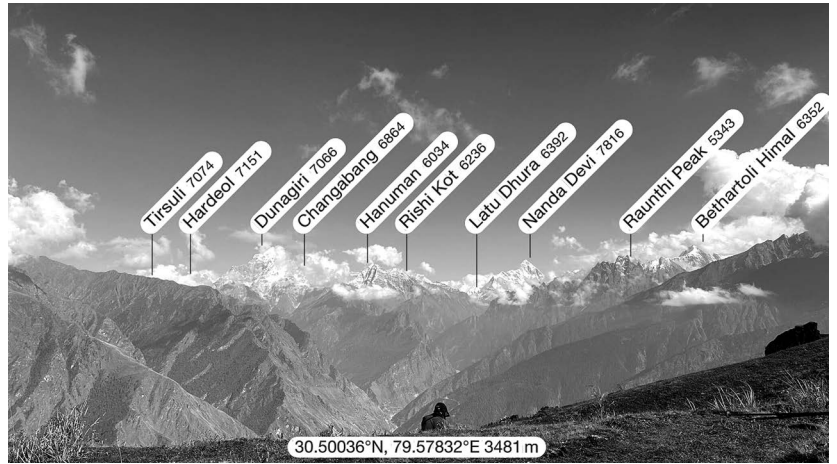
10月1日、羽田空港からインデイヤ・ガンジー空港に降り立った。デリーでの2日間は、両替や現地エージェントとの行程確認などであつという間に過ぎた。

10月4日(晴)デリー(列車)カトゴダム(車)アルモラ(標高1651m)。移動距離523km、所要時間(休憩・食事を含む)12時間。

早朝のニューデリー駅から列車と車を使い継いでアルモラに移動。車窓からの景色は街並み、工場群、農村地帯と目まぐるしく変わる。

5日(晴)アルモラ(車)ムンシャリ(2272m)。190km、7時間30分。

アルモラからムンシャリまでの舗装道路は日本の林道を走っているようで、気持ちが良い。アルモラから20kmくらい走った所から48年ぶりのナンダ・デヴィとナンダ・コットが見え感激した。ムンシャリのホテルの北東方向にはパンチ・チュリ山群が眺められた。



クアリ・パスに向かう途中の稜線から遠望したナンダ・デヴィ方面の山々

自動車道路はガウリ・ガ
ンガ沿いにミラムまで通じ
ているが、ラガリの上方で
の山腹崩壊で寸断されてお
り、手前のラガリから歩く
ことになる。ブグディアア
ルにはITBP（インド・
チベット国境警察）があり、
パスポート・チェックを受
けた。

8日(晴)ブグディアール
〜リルコット(3161m)
16km、7時間30分。

朝方、発破の轟音が目
が覚めた。至る所で補修工
が行なわれている。途中、ミ
ラムからムンシヤリに下る
羊の大群に会った。春まで
の半年間は、ムンシヤリで
過ごすという。

9日(晴)リルコット〜ガ
ンダール(3419m)。14km、7
時間10分。

ガンダールは、オールド・ビレ
ッジと呼ばれる美しい石造りの十
数戸の集落であるが、現在は1家
族しか住んでいない。

10日(晴)ガンダール〜ナンダ
・デヴィ東BC手前(3917m)。
5km、4時間30分。

6日(晴)ムンシヤリ(レスト)
6・4km、2時間。
ホテルの近くにあるナンダ・デ
ヴィ寺院に出かけた。色とりど
りに装飾された小さな寺院で踏査の
安全遂行を祈願した。
7日(晴)ムンシヤリ(車)ラガリ
〜ブグディアール(2438m)。
38km、5時間20分。



本稿でレポートしたのは①②③の東部ガルワール山群

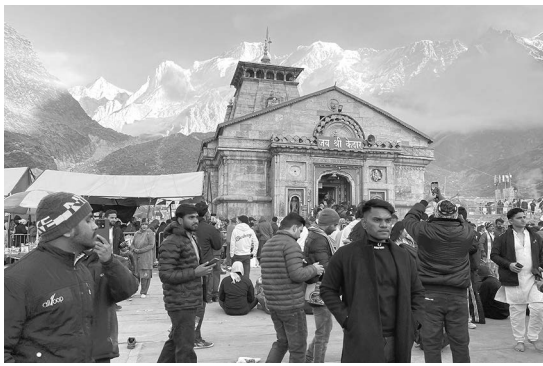
良く踏み込まれた道を東BCに
向かう。木々の黄葉が美しい。元
来の東BCはモレーン上にあるの
だが、この時期、水が取れないの
で手前の台地がキャンプサイトと
なった。

11日(晴)ナンダ・デヴィ東BC
手前〜マルトリ(3394m)。14
5km、8時間50分。

夜半から待望のナンダ・デヴィ
が見え始めた。ロングスタップの
コルから東峰、さらに主峰への稜

線を目で追いながら往時を懐かし
んだ後、ひたすら下りガウリ・ガ
ンガに架かる橋を渡って、マリト
リへの急崖をあえぎあえぎ登った。
今から88年前に立教大学隊が訪れ
たときには100戸くらいになつて
集落も、今は10戸くらいになつて
いる。

12日(晴)マルトリ〜ナラデヴィ
(2746m)。18km、8時間45分。
朝方、村外れのナンダ・デヴィ
寺院を訪れた。彼方にナンダ・コ



多くの参拝客たちでにぎわうケダルナート寺院

ットとナンダ・デヴィ東峰を従えた、イエローとオレンジに彩色された派手なお寺である。

13日(晴) ナラデヴィ(ラガリ(車)ムンシャリ(2272m)。42km、5時間20分。

14日(曇)ムンシャリ(車)バゲシユワール(2320m)。125km、6時間。

15日(曇のち晴)バゲシユワール(車)ジョシマート(1875m)。194km、8時間。

76年の合同登山隊の基地となったジョシマートは様変わりし、ホテルが立ち並び、軍事施設も大幅に増強されていた。

16日(晴)ジョシマート(レスト)

クアリ・パスを越える

予定では76年の登山ルートをたどり、ダランシ・パス(4245m)までの往復だったが、湯水期で取水できないとのことで、西面のクアリ・パス・トレックに変更した。このコースは1905年、ロード・カーゾン元インド総督が越えたと言われ、36年、シプトンとティルマンがナンダ・デヴィ初登頂の折に越えた峠でもある。

17日(晴)ジョシマート(車)アウリ(タリー・フォレストキャンプ(3351m)。23km、7時間20分。

アウリのスキー・リゾートから歩き始める。稜線に出るとナンダ・デヴィ主峰(7816m)を中心に壮大なパノラマが展開する。キャンプサイトでは、コルカタから来たという30人前後のインド人パーティに会った。

18日(晴)タリー・フォレストキャンプ(クアリ・パス(3722m)→ダクワニ(3146m)。8km、6時間40分。

19日(晴)ダクワニ(パナ(2764m)。9.3km、7時間。
20日(晴のち曇)パナ(セム・カ

ルカ(2633m)。14.8km、9時間20分。

21日(晴)セム・カルカ(ラムニ・パス(3196m)→ラムニ(2557m)。10km、7時間。

ラムニ・パスでは10人ほどの欧米人パーティにも会い、人気のコースだと実感した。

22日(晴)ラムニ(車)ジョシマート。109km、6時間。

ヒンズー教の三大聖地を巡る

23日(晴)ジョシマート(車)バドリナート(3141m)→マナ(バドリナート。52km、5時間。

ガルワール最奥の村マナとバドリナート寺院を訪れた。

24日(晴)バドリナート(車)ジョシマート(車)ピパルコット(1391m)。76km、3時間。

25日(晴)ピパルコット(車)グプタカシ(1447m)。132km、6時間30分。

26日(晴)グプタカシ(車)ガウリクンド(ケダルナート(3555m)。42km、12時間。

車を降りるとケダルナート寺院に歩いて向かう人、馬や駕籠かごや背負い籠かごに担がれて登拝する人の数は1日数千人といい、乾燥して舞

い上がる馬糞と塵がすごい。頭上には参拝客を運ぶヘリコプターも行き交い、爆音が一日中絶えることがない。

27日(晴)ケダルナート(寺院参拝)。ものすごい数の人で、本殿の参拝に5時間を要した。

28日(曇のち晴)ケダルナート(馬・車)グプタカシ。44km、7時間40分。

29日(晴)グプタカシ(車)ウッタラカシ(1361m)。215km、9時間30分。

ウッタラカシでは、ネルー登山学校を訪問した。日・印合同登山のときのインド側隊長のジャゲジツト・シン大尉は当時、学校長だった。面談した若い学校長はまだ生まれていなかったと言う。

30日(晴)ウッタラカシ(車)ガンゴトリ(3077m)。93km、4時間40分。

31日(晴)ガンゴトリ(車)ウッタラカシ。95km、5時間

11月1日(晴)ウッタラカシ(車)リシケシ(377m)。168km、4時間30分。

2日(晴)リシケシ(車)デリー(300m)。241km、5時間。
3日(晴)デリー。

連載■文庫本でも楽しめる

山の名著再読

(33)『白きたおやかな峰』(北杜夫著・新潮社)

中村好至恵

本書は小説家の手による山岳小説の一つだが、『孤高の人』や『聖職の碑』など有名な登山家や記憶に残るような山岳記事・記録、遭難モノの小説化ではなく、著者・北杜夫自身が1965年、京都府岳連カラコルム登山隊にドクターとして参加した遠征を基にした小説である。久しぶりに読み返してみても、この本は単純に一級の小説として楽しめるものであると感じた。つまり本職の作家ならではの文章はさすがで、現場を経験したことのない読者にもその場面が心にありありと描ける言葉の力があり、また、小説ならではの人間模様も味わえる。

白きたおやかな峰
北 杜夫

昭和41(1966)年初版発行

たとえば、目指すディラン峰がや

つと見えたときの描写。「あくまで濃藍の空が、その白さをいやがうえにも強調し、ディランはお伽の国の魅惑にみちた特別製の砂糖菓子のように眩ゆく光り輝いた。裸身をむきだしにして一同をさし招く純白のあやかな美女」とあるが、その美女が次第に本性を剥き出しにし、彼らを苦しめていく様には臨場感があり、読んでいるだけで胸が苦しくなるほどだ。

元々山は素人であり「この遠征に参加することを、かなり無造作に考えて」来ていたドクター柴崎と北杜夫。ベースキャンプでは夜、小用で外に出た折「あやしうまで白い」ディランを目にして「おれもやはり山が好きらしい」と嬉しくなり、寝袋に入った後も「松本高校を志望したのは、山があるからであつた」と遠い昔を思い返す。

しかし、物語が進みキャンプの高

度が上がるとともにドクター自身、高山病などで体調を崩し、隊員たちが山頂を目指すころには、苦しいラッセルや命懸けのアタックの描写とともに、極限の世界に身を置く者たちの想いが綴られ、それらは著者の独白とも言える語りとなる。小滝隊長はじめ隊員たち皆に、それぞれの消しがたい苦い過去や日常があり、生きる苦悩がある。この本が山岳書以前に、小説として感銘を受ける深さは、そうした人間の表には出ない本性や心の機微、また、北杜夫自身の述懐ゆえだろう。

また、この遠征実話の一部は、実際隊長であった小谷隆一が著した『山なみ帖その後』(茗溪堂)のⅢ章に記されているが、小説に登場する人物像の中で、小滝隊長「その人の知性的で穏やかな人柄は文中にも遺憾なく表現されており、北の小谷に対する想いの一端がうかがわれる。彼らは旧制松本高校の同窓で、北は小谷の一級下。あの『どくとるマンボウ青春期』(北杜夫著・新潮文庫)に登場していたがごとの寮生活で特に親しかったというのだから、半端な親しさではなかつたろう。しかも「無造作に考えて」いたドクターとしての遠征承諾

自体、実話では北は泥酔していて覚えていなかったというのだから、やはりパンカラぶりは相変わらずである。

そんな後日談や、破天荒ぶりも併せて読むと一層面白さも増すだろうが、筆者がこの小説を読んだのは、山などとは全く無縁だった、もう何十年も前の学生時代だった。超高度の山に挑む未知なる世界がこの世にあること、日常と隔離された極限の世界で繰り広げられる登攀の興奮と衝撃、また、神域の自然の美しさなど、主役である山の存在が何故か忘れ難かった。

この本が北杜夫という作家の小説だったことも、山に無縁な自分が手に取った一つの理由と思うが、後年、いくつかの事柄を縁にして自分の中にも芽生えた山への思慕に、この本がなんらかの影響を与えていたのは確かだろう。ただ、数十年経って再読した現在より、かつてその瑞々しい感性で数倍も感銘を受け忘れがたい一冊にもなっていた、当時の若かりし自分が今となってはひどく懐かしくなるのだった。

現在では、中古にて河出文庫版、電子書籍で新潮文庫版がある。

(図書委員会委員)

③4『強力伝』（新田次郎著・朋文堂）

北島洋一

私が高校生のとき、父親が会社から帰って来るなり新潮文庫の『強力伝』を差し出し、その中の「落とし穴」という小説が面白いぞ、と言うのだ。

『強力伝』は、新田次郎が週刊誌『サンデー毎日』の懸賞小説に応募して1等選ばれ、さらに直木賞も受賞した、小説家としてのデビュー作品である。「落とし穴」は受賞後の最初の作品だった。

新田次郎、本名藤原寛人は、今の気象庁である中央気象台に勤務しながら小説を書いた人であるが、富士山頂リーダー設置の責任者を務めたのをひと区切りとして、気象庁は退職している。

彼は若いころ、昭和7（1932）年から12年まで富士山頂観測所に勤務しており、そのときに、強力伝のモデルとなった小見山正さ



昭和30（1955）年初版発行

んに会っている。戦後、新聞で小見山さんの娘さんの妙子さんが、

金時山の金時娘として話題になったのを読んだ新田は彼を懐かしく思い、墓参りをするつもりで金時山に登り、その帰りに麓の小見山さんの実家に立ち寄ったそうだ。仏壇の前には、彼が書いた日記が置かれていて、それを読み、奥さんの話を聞いてこの小説を書くことを決めたという。

小見山さんが白馬岳の山頂に運び上げた風景指示盤は花崗岩でできており、いくつかの部品に分かれていたものの、大きなものは1つが50貫（約187kg）もあったそうだ。それを人力で運び上げるようになったのは、主催した新聞社が宣伝効果を狙ったことのように思う。昭和16（1941）年という時代がそうしたヒーローを求めているのかもしれない。

地元の誰もが引き受けられないその仕事を小見山さんの所へ持って来たのは、冠松次郎だそうだ。

何よりも新聞に載ることを名譽に思っていた彼は、後に引けなく

なったのだろう。日記には、新聞社から前金を受け取ったことが書かれてあった。

新田次郎の作品には、『強力伝』のほかにも実際の人をモデルにした小説がある。『采光の岩壁』は芳野満彦がモデルであり、新田は執筆中、1週間に1回は芳野と連絡を取って小説を書いた、とある。しかし、そうして書かれていても彼の作品はノンフィクションではなく、小説なのだろう。

「山男に悪人なし」あるいは「登山する女性に美人はいない」といった俗説に逆らって出した小説もある。『縦走路』はそうした作品であり、私は高校生のときに、ドキドキしながら読んだ覚えがある。それから次々と新田の山の本を読んだのだが、彼の小説は登山家と称される人からは批判を受けた、と『小説に書けなかった自伝』にある。

「岩登りもしたことのないのに岩壁登攀の小説を書いて実にけしからん」とも言われたそうだ。新田は女性を書くのが下手だ、と批評したのはほかならぬ彼の奥様だ。

そもそも、新田は「山岳小説家」と呼ばれるのを嫌がっていたようだ。自分は山を描いているのでは

なく、人を描いているのだ、と。そう考えると、彼の代表作は、歴史小説の『武田信玄』かもしれない。

そうは言っても、山歩きを楽しんでる皆さんは、新田次郎の作品で手が出るのは山に関する本であろう。そこでお薦めなのは、富士山に関する本だと言っておきたい。彼は若いときに通算400日は山頂で気象観測のために過ごしており、富士山独特の硬くツルツルの氷や突風もよく知っている。それだけにリアルな表現になっている。山頂での越冬観測を初めて試みた野中至の奥様を主人公にした『芙蓉の人』、富士山頂リーダー設置の自分の体験を書いた『富士山頂』など、10作品も富士山に関する本がある。その中でも『強力伝』は必読の書だと言えるだろう。

そして、新田次郎の作品ではないが、戦後の強力である並木宗二郎さんを描いた『雪炎 富士山最後の強力伝』（2024年、井ノ部康之著・ヤマケイ文庫）という本もあることをお知らせしておこう。本書の文庫版は、新潮文庫（1965年初版発行、税込737円）で読むことができる。

（図書委員会委員）

REPORT

2024年ピオレドール賞
授賞式をイタリアにて開催

国際委員会委員長 和田 薫

2024年のピオレドール賞授賞式が12月8日から10日まで、イタリアの北東部、ドロミテ山塊にあるサン・マルティーン・ディ・カストロツァで開催され、筆者は今年も出席した。

平出和也・中島健郎両氏によるテイリチ・ミール(7708m)北壁初登攀の受賞が大きな話題になり、すでにインターネットなどメディアで書かれているので、本稿

では2人の受賞以外の部分で、個人的な所感を記したい。

今年の登山界の最大の話題で受賞が確実視されていたのは、なんと言つてもジャヌー北壁のアルパイン・スタイルでの初登攀であろう。アメリカ人の3人(アラン・ルソー、ジャクソン・マーベル、マツト・コーネル)が、3年連続3回目の挑戦で23年11月に完登した。なぜ「アルパイン・スタイル」と付記するかといえば、ジャヌー北壁の直登は、04年にロシアのチームが約50日間かけて3400mのフィックス・ロープを張つてすでに登っているからだ。

ロシア隊とは対照的に3人は装備を最低限に抑え、超軽量空気注入手のポータレツジとロープを1本だけ持つて、7710mの頂を目指した。あまりにぎりぎり、80回以上の懸垂下降で下山したときにはギアが足りなくなるため、1つのミスも許されなかった。

こう書くと、さぞ無謀な登攀だ

つたのではと思う向きもあるだろうが、決してそうではない。過去2回の試登の経験から計算し、アルパイン・スタイルでは到底無理だろうと言われていた高所でのテクニカルな登攀をやり遂げた。3人はロシア隊にも敬意を示しており、感銘を受けた。

もう1つの受賞登攀は、若いスイスの3人(ユーゴ・ベガン、マティアス・グリビ、ナタン・モナール)によるフラット・トップ(6100m)北壁だ。インドのキシチュワールの一帯は、地政学的な理由から外国人の入山が厳しく制限されていたが、最近はその状況が緩和しており、魅力的な未踏峰が残っていると多く多くのクライマーを惹き付けている。

テイリチ・ミール、ジャヌーと比べると、話題の大きさからどうしても小粒に見えてしまうが、審査員たちは、技術的にも難易度が高いラインを登り、未踏の西壁を下している点を評価しており、ピオレドールという賞の真摯な姿勢を見てとることができる。

受賞登攀のほかに、「生涯功労賞」はスペインのヨルディ・コロミナスが、今年から設けられた「女性特別賞」はイタリアのニブス・メロイが受賞した。また、今年の1つの大きなテーマは、「登山におけるリスク」であったと言える。レベルの高い登山には私の想像も及ばない危険が伴う。昨年は平出・中島両氏を含む過去のピオレドール受賞者5名が山で亡くなっており、授賞式の冒頭では追悼の機会が設けられた。記者会見では、リスク・マネジメントについての考え方に質問が出て、ジャヌーの3人が、大きな壁に挑むことと、撤退する判断やそのリスクの考え方について思慮深く回答していた。

このように、3日間にわたって受賞者や地元クライマー、各国から参加した山岳ジャーナリストらがそれぞれ活発に話し合い、大変有意義な時間となった。既存の知識や過去の経験に凝り固まらず、対話を通じて新しい考え方を得ることは、未知の世界に踏み出す登山に通じるものがある。海外の登山家が日本よりも優れているとは言わないが、国際交流や意見交換を通じて得られるものは想像以上に大きいはずだ。日本でもこのような機会が得られることを願っている。



授賞式参加者たちと雪の中をハイキング

活動報告

日本山岳会
各委員会、同好会の
活動報告です。

支部事業委員会／北海道支部

「山の天気ライブ授業」 イン札幌

日本山岳会会員で、山岳気象専門会社ヤマテン社長・猪熊隆之さんを講師に招いて、「山の天気ライブ授業イン札幌」を2024年10月26日・27日、札幌で開催し、支部の会員・会友のほか大勢の一般市民にも参加していただいた。

26日は机上学習として、札幌・りんゆうホールを会場に、71人が集まった。

猪熊さんは、パワーポイントを使って、ビジュアルなデータを示しながら、ヤマテンが作成した「気象遭難を起こさないための安全登山ノート」に沿って、気象のリスクや天候が悪化したときに、どのような状況になることが考えられるのかを「知る」ことの重要性とともに、知らないが故に天候が悪化し



手稲山登山道上で観天望気のポイントを解説する猪熊講師(手前)

ても計画どおりに山行を強行する人が多い現状に危惧を示した。

その上で、計画段階で天気図や地形図などからいろいろな気象リスク、地形リスクを知ること、「備える」こと、さらに登山中にメンバーの体調、体力、技術、ルート状況、天候が事前の予想と異なるときの観天望気を利用した天候予想の修正など、「行動する」に至る3

つのステップを踏むことの重要性にも言及していただいた。

さらに、同じくヤマテン製作の「空見リスクマネジメントMAP」も交えて、登山ルートにおける気象リスクの違いや、どのポイントで進退判断や観天望気を行なうべきかを強調。また、具体的な気象リスクである低体温症や落雷、沢の増水、強風などから身を守るための方法について、北海道の気象遭難事例を交えながら説明してもらった。

翌27日は、前日の机上学習を踏まえて、手稲山でのフィールドワークとして実地の観天望気を行なうため、50人が臨んだ。

猪熊さんは参加者とともに、手稲山山頂までスキー場コースをゆっくり歩きながら、随所で立ち止まって、雲や風向きから、その後の天気の変化を予測する観天望気のポイントを説いた。

この日は、高度を上げるにしたがつて、遠く日本海まで見渡せるようになり、時間の経過とともに多様な雲が各方向に出現し、観天望気日和だった。猪熊さんは、雲の種類、その状態変化を観察することが天候予測の上で重要になる

ことを分かりやすく解説。

山頂では、全員で昼食タイムをとり、参加者は猪熊さんと雑談したり、記念撮影するなど、懇親する光景が繰り広げられた。

多忙な日程の中、北海道での集まりに時間を割いていただいた猪熊さん、サポートや助言をしてもらった支部事業委員会の宮崎峻一さんに篤くお礼を申し上げたい。

(北海道支部長・黒川伸一)

図書委員会

山岳図書を語る夕べ

『孤高に生きた登山家 岡野金次郎評伝』著者・鈴木利英子氏を招いて

12月11日、104号室にて「山岳図書を語る夕べ」が開催された。今回は、岡野金次郎の評伝『孤高に生きた登山家』（会報11月号）図書紹介（参照）を上梓された鈴木利英子氏を講師にお招きし、謎が多いとされる岡野の生涯について語っていただいた。

鈴木氏は岡野も晩年を過ごした平塚市在住で、自らも地元山岳会に所属する。ノンフィクション講座の受講がきっかけで「平塚人



岡野金次郎を知る貴重な時間となった講演会

物史研究会」を立ち上げ、岡野も収録されている『平塚ゆかりの先人たち』を発行。これが起点となり、岡野の親族との交流が始まり、親族をも巻き込んだ岡野研究が始まった。共著者である作家・フリーランス・ライターの前木遥氏は娘で、調査は利英子氏が、執筆は遥氏が統括した。

岡野は横浜市に生まれ、近くに住む小島烏水と親交を深め、日本の近代登山の幕開けと言える山行乗鞍岳、槍ヶ岳などに登頂する。米国系の会社に勤務していたこともあり、ウェストンの著書を偶然に見つけ訪ねるとともに、小島をウェストンに紹介し、ふたりしてアール・パイン・クラブの設立を熱心に

勧められる。

これが日本山岳会の設立となるのであるが、岡野は入会するものの、功労者でありながらなぜか発起人とはならなかった。小島は山岳会の初代会長となって山岳史にその名を刻むことになるが、岡野は自ら記録を残すことなく、埋もれた存在になってしまった。

そして小島が渡米すると、岡野はひっそりと山岳会を退会する。「名士扱い」を嫌がったのと、「記録を公表することに興味がなかったこと」が小島なき山岳会の退会に至った理由、と鈴木氏は分析する。岡野は、登山家として名を売ることよりも純粹に山を楽しむみたかったのだ。

岡野の早期の山行記録は少なく、小島の山行記録や山岳会の機関誌『山岳』から紐解くしかないのであるが、関東大震災以降については、日記や書簡が親族により保管されており（以前のものは震災により焼失）、山岳会退会後も小島と温かい交流が続いたことや精神的に山行を続けていたことが明らかになった。鈴木氏の親族への取材や、膨大な資料の分析は岡野の生きざまを解き明かし、岡野の再発見とな

った。

岡野は山岳会とは距離を置いたものの、自身の信念に忠実に、山に登り続けた「孤高の登山家」であったことを教えられた講演であった。（木根康行）

山行委員会

年次晩餐会記念山行・鋸山

この時期らしい乾いた晴天の下、12月8日に晩餐会記念山行が開催された。千葉支部、首都圏の支部に加え、福井、青森、東九州など全国から集まった40人弱が千葉の名山「鋸山」を目指した。街中を抜け、山から切り出した石を運んだ車力道を、木々の間から見える東京湾や美しい紅葉を眺めながら進む。長く急な階段を登り、尾根に出で、小さなアップダウンののち山頂に到着した。

貴重な一等三角点、菱形基線測点にタッチして、きらきら光る海を眺めて山頂を満喫。尾根をたどり、到着した鞍部で待望の昼食となった。久々の再会に、ゆっくると会話を楽しんだ。全員で記念撮影のち出発。急な階段を慎重に下り、古代遺跡のような石切場に



鋸山山頂での記念撮影

到着した。スケールの大きさに、どうやって切り出したのだろうか？ と皆で盛り上がる。その後は富士山を望みつつ下り、浜金谷駅に到着し、ここで解散となった。電車、フェリー、バスと、それぞれの交通手段を選び、帰途についた。

参加者は、景色を楽しみながらのんびりと登り、なかなか会えない他支部の皆さんとよもやま話に花を咲かせながら、思い思いに鋸山を堪能されていた。冠雪した東京湾越しの美しい富士山を望み、変化に富んだ鋸山と参加者との交流を堪能した、味わい深い山行だった。（千葉支部 中田 彩）

北海道犬旅サバイバル

服部文祥著

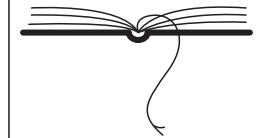


2023年9月
みすず書房 256頁
四六判 2400円+税

50歳という節目の年を迎えるタイミングで、北海道を舞台に2019年10月1日～11月25日、約2ヶ月にわたり行なわれた宗谷岬から襟裳岬までの南北縦断700kmを「できるだけ北海道の分水嶺沿い」に縦断した徒歩旅行(全山縦断ではない)の記録で、著者が長年行なってきた、「サバイバル登山」の集大成に当たる。

本当にやりたいことを突き詰めた末に浮かんだ、鉄砲を肩に犬といっしょに荒野を歩くイメージと、お金を持たなければ北海道は広大な荒野になる、という発想に基づ

図書紹介



いた旅。タイトルに「犬旅」とあるように、山旅犬のナツが副主人公のような大事な役割を果たしている。

著者について改めて紹介する必要もないとは思いますが、「生命体としてなまなましく生きたい」という欲求から始めたという『サバイバル登山家』(2006年)で鮮烈なデビューを果たして以来、登山家、作家としてお馴染みの人で、みすず書房からは5冊目の著作となる。

サバイバル登山についておさらいをしておくと、「食料・燃料を可能な限り現地調達し、自分でルートを定めて長く山中を旅する」というもの。もちろん、スマホ、GPS、ガスバーナー、ヘッドライト、ラジオといった文明の利器はなし。なるべく人工的な力に頼らず、自分の力で自然のままの岩をフェアに登ろうとするフリークラ

図書受入報告(2024年12月)

著者	書名	頁/サイズ	発行者	発行年	寄贈/購入別
安間繁樹	秘境探検：西表島踏破行	320p/21cm	あつぷる出版社	2024	著者寄贈
真栄隆昭	深田久弥 その人と足跡	210p/21cm	真栄隆昭(私家版)	2024	著者寄贈
真栄隆昭	深田久弥 ゆかりの人々	127p/21cm	真栄隆昭(私家版)	2023	著者寄贈
法政大学山岳部 編	法政大学体育会山岳部100周年記念誌	208p/26cm	法政大学体育会山岳部山想会	2024	発行者寄贈
清水敏一追悼集編 集委員会 編	光輝燦然：大雪山を“掘った”山岳史家 清水敏一追悼集	528p/22cm	清水敏一追悼集編 集委員会	2025	発行者寄贈
ウォンティティローチ・タンヤボン	DEAR GRANPA NATURE：自然とわたしと 清水さんと	67p/21cm		2025	発行者寄贈

イミングの思想から色濃く影響を受けている。

今回の旅では、往復の航空チケットだけ持ち、財布もクレジットカードも持たず、事前に小屋にデポした米以外の食料を自力で調達する。北海道は10月1日からが猟期となり、携帯する猟銃で仕留めたエゾシカを自ら捌いて肉を食べる、といったルール設定概要となる。

大きく前半戦、中盤戦、後半戦の3章構成になっており、北端の宗谷丘陵から天塩岳ヒュッテまでが前半戦、大雪山系の東側を越えて山小屋芽室岳までが中盤戦、核心部となる日高山脈の西側を越えて襟裳岬に至るまでが終盤戦に当たる。

北海道の10月から11月末は、紅葉が始まり、雪が降っては融けを繰り返しながら完全な根雪になる前の、空気が澄んでぴりりと冷たくなる時期。そんな空気感の中、自分が食べる獲物を確保し、寝泊まりする場所を確保し、火を熾して料理をつくるシーンを中心に、ときおりの登山を挟みつつ、一筋縄ではいかない旅の行程が日記形式ではなく生き生きと描かれている

のが読みどころだ。

面白いのは天気予報を「神のお告げ」と称して、公衆電話にテレフォンカードを入れて聞き出したり、所々で出会う人たち——森林管理署の職員、小屋で出会う登山者、くず野菜をくれる農家の人、有害鳥獣駆除のハンターなどとのやり取り。特に無銭旅行と称しながら、襟裳岬に到達した後に、軽トラのオッサンからお金を恵んでもらうのに逡巡するくだりは面白い。基本的に反文明の原理主義なのに、自分が決めたルール設定に対して拘子定規でなく、適度にルーズで欲望に正直なのが良いような悪いような、複雑な気持ちにさせてくれるのも著者の計算の内なのかもしれない。

そして、ときどき行方不明になつて著者（と読者）をやきもきさせるナツの存在が、絶妙なアクセントになっている。

また、失われゆく若さ、迫る老いと冒険、というテーマが根底にあるところにも注目したい。左膝の痛みから始まり、イボ痔に苦しみながらそれでも歩き続けるという、だまされまじやつていく冒険という風情に、青春期の尖った冒

険とは違った趣が感じられて良い。改めて冒険とは、自分でスタイルを定義して、空腹や不足といった何かの欠落を抱えながらも到達目標までの空白を埋めていく行為だ、ということ。そして、何歳になつても冒険は自分で決めて行なえるものだ、ということを再認識させてくれる本だった。

読み終わつてから、少しでも真似してみようと思つたが、サブイバル登山は狩猟免許が必要なのでハードルが高い。そこで、きのこ採りを里山ハイキングに加えてみると、山と自分の距離感ががらつと変わったように思えて、とても新鮮だった。

（市川純造）

獲る食べる生きる 狩猟と先住民から学ぶいのちの巡り

黒田未来雄著



2023年8月
学館判 252頁
小四六判 2400円＋税

「山」の図書紹介に採り上げる本

としては、少し異質な印象を受けるかもしれない。紹介する私自身も、図書室の受け入れ書籍として手に取るまで著者や著書を知らなかった。が、読み進めるうちに夢中になり、最後は一気に読み進めた。ハンターを目指すひとりの男の成長物語とも言える本書は、心の深いところで強い印象を残す一冊となった。

著者の黒田未来雄は、三菱商事を経て1999年にNHKに転職し、『ダーウィンが来た』などの自然番組をディレクターとして制作。2023年早期退職、ハンターとして狩猟の魅力を伝える活動をしており、本書もその一つである。現在50代の著者が、どのようにして狩猟を目指すようになったのか、新たな後半生をスタートする自己紹介の書とも言える。

なぜ狩猟に興味を持ったのか、その理由は、いくつか紹介される出会いのエピソードをたどることです。少しずつ明らかになっていく。

カナダのユーコン源流、先住民の彫刻家キースとの野営と狩猟への同行からその物語が始まる。著者は、あるイベントにタギッシュ・クリンギット族の語り部として来

日していたキースと出会う。そのキースのカナダの自宅を訪ねた旅で的一幕だ。旅の中で、ミュールジカの狩猟・解体も経験し、彼らの一族の言葉で「人間」を意味する言葉に出会う。

Part of the Land, Part of the Water (大地の一部、水の一部)

そもそも、なぜ北米先住民に興味を持ったのか。そこには星野道夫への憧れがあった。前述のキースとの出会いの前の話である。星野の死で、実際に会うことが叶わない夢となるが、『地球交響曲第三番』(龍村仁監督作品)に出演していた星野の友人で犬ぞり家のメアリー・シールズを訪ねる。メアリーから聞く星野のエピソードや、この旅で手にする、ある「切符」がキースとの出会いにつながっていく。

後半は、2016年に北海道への異動を機に、独り銃を担いで山に入る「単独忍び狼」を行なうハンターを目指す道のりが描かれる。入会した狩猟同好会で、師となる人物と出会い、エゾシカ狼で経験を積んでいく。忍び狼は単独であるがゆえに危険と隣合わせで、遭難の一つ手前のような目にも遭う。

また、有害駆除の補助金目当てでハンターに撃たれ、そのまま放置された小鹿との出会いも書かれる(死体放置は違法とのこと)。

本書のクライマックスは、「ひぐま狼記」の章だろう。著者にとつて5年目になる狼期にどうとう罠を撃つのだが、そのために春からその山域に通い、動植物を獲り、観察し、山の自然に感情移入して準備する。さらに秋の狼期に入る

と、罠の糞や足跡からも様々な情報を読み取り、狙いを定める。そして、運命の日。仕留めた罠は、子連れの母罠だった。

都市部へのクマ出没、鹿の食害などが日常化した今日、本書を読むことで山の動物を「いのち」あるものとして、少し違った視点での見方ができるのではないかと、思いを新にしている。

(内田光太郎)



令和6年度第8回(12月度)理事会
議事録

日時 令和6年12月12日(木)19時00分～20時50分

場所 集会所およびオンライン
(Zoom)

【出席者】橋本会長、永田・桐生各副会長、長島・南久松・平川各常務理事、松田・川瀬・望月・原田・猿渡・久保田各理事、石川・清登各監事

- 【欠席者】飯田副会長、池田理事
- 【オブザーバー】節田会報編集人
- 【審議事項】
 1. 寄附(特別功労会員)の依頼について(永田) (賛成12、反対0)
 2. 年次晩餐会記念講演会の菊池講師への謝金について(長島) (賛成12、反対0)
- 【協議事項】

1. 令和7年事業計画の策定について協議した(長島)
2. 支部連絡会の手順について協議した(長島)
3. 岡野金次郎碑前祭への理事派遣依頼について協議した(松田・長島)

【報告事項】

1. 入会承認報告(橋本)
2. 東京支部設立の進捗状況報告(松田)
3. 「平出、中島両氏お別れの会」における『山岳』編集委員会の協力(久保田)
4. 創立120周年国際交流事業に関する準備会の報告(桐生)

【その他】

1. 「山」12月号の進行状況について(久保田)

ルーム日誌 12月

- 2日 総務委員会 記念事業委員会 (山岳古道調査)
- 3日 広報委員会 スケッチクラブ
- 4日 総務委員会 山行委員会
- 5日 常務理事会 YOUTH CLUB委員会 山岳地理

6日	クラブ 総務委員会 記念事業委員会 (国際交流) グレート・ヒマラヤ・トラバース	20日	会 (国際交流) グレート・ヒマラヤ・トラバース 120周年記念事業委員会 記念事業委員会 (国際交流) 自然保護委員会
9日	記念事業委員会 (山岳古道調査) アルパインスキークラブ	21日	アルピニズムクラブ 山の自然学クラブ
11日	図書委員会 (山岳図書を語る夕べ) 休山会 山想クラブ かつばの会	23日	クニ塾
12日	理事会	25日	子どもと登山委員会 緑爽会 12月来室者 267名
13日	図書委員会 登山講習会		
16日	総務委員会 平日クラブ		
17日	麗山会 アルパインスキークラブ (幹事会) バックカントリークラブ		
18日	つくも会 三水会 山遊会		
19日	支部連絡会 記念事業委員		
		酒井敏明 (4656)	24・12・3
		三輪利雄 (4995)	23・11・16
		高遠 宏 (5532)	24・2・22
		菅沢豊蔵 (6701)	24・12・17

間もなく東京支部を設立します

4月に日本山岳会34番目の支部として、東京支部を設立すべく準備中です。会報「山」2月号にチラシを同封して支部員募集を開始します。4月16日(水)に設立総会を予定しています。

首都圏には支部に所属していらっしゃる方が約80

0名おいでになります。どれくらいの規模になるか蓋を開けてみるまで分かりませんが、日本山岳会の未来に向けた楽しい支部にしたいと、世話人一同張り切って準備をしています。皆様の参加をお待ちしています。

(東京支部設立世話人一同)

佐藤衛士(7835) 24・12・8
七里 直(8818) 24・11・16
中瀬龍男(14333) 24・11・28
退会

江田宗友(9219) 越後
中川幸平(11988)
須磨岡輯(13899) 関西
松島貴志子(16594)

◆いいとこ歩き遍路プラス ①徳島・高知 山行委員会

四国八十八ヶ所1200kmを、春秋4回の区切り打ちで良い所を歩き、プラスを楽しみます。初回は徳島県の発心の道場の1番札所・霊山寺から高知県の修行の道場・27番神峯寺まで順打ちします。

日程 3月14日(金)〜20日(木) 6泊 7日

集合 14日JR徳島駅改札口8時
14日に夜行バスで到着あるいは前日徳島泊。

行程 14日 徳島⇨大塚美術館⇨眉山⇨徳島市(泊) 15日
1番霊山寺⇨11番藤井寺⇨川島町(泊) 16日 11番藤井寺⇨

井寺―12番焼山寺⇨13番大日寺―17番丹戸寺―国府町(泊) 17日 18番恩山寺⇨19番立江寺⇨別格3番慈眼寺―勝浦町(泊) 18日 生名―20番鶴林寺―21番太龍寺―22番平等寺―新野町(泊) 19日 新野町⇨日和佐駅―23番薬王寺―日和佐駅⇨24番最御崎寺―室戸スカイライン入口⇨室戸―25番津照寺―26番金剛頂寺―不動岩―不動岩遍路文化会館⇨奈半利(泊) 20日 奈半利駅⇨モネの庭マルモツタン⇨奈半利駅⇨唐浜駅―27番神峯寺―唐浜駅(解散) 1日1〜6時間(やや健脚

歩程

向き)

費用 参加費3万円(タクシー、通信費等)、1日約1万円(宿泊代はその都度精算、賽銭、納経、昼食代) *傷害保険は各自。遍路用品は約2万円。別途往復交通費。

定員 8名(先着順)

申込み 2月1日~3月10日まで

数見直 ☎090・7204・4668

☎090・7827・0155

@jac.or.jp

◆特別講習会のご案内

アルパインフォトクラブ

プロラボから講師をお招きし、原板から写真プリントができるプロセスを学び、さらにプリント技術のテクニクについて特別講習会を開催いたします。

日時 3月11日(火) 18時30分~19時30分。

場所 日本山岳会ルーム104 (会議室)

演題 ラボから学ぶ作品作り

講師 清水明氏(榎堀内カラー)

内容 ①原板から写真プリントができるまでのプロセスを学ぶ

②スマートフォンや普及版コンパクトデジタルカ

メラを用いたプリント作り *実際に全紙サイズに印刷して作品作りの可能性を探ります。

会費 無料

申込み アルパインフォトクラブ

へ。担当 田口克彦 ☎90・8034・2003

☎090・7827・0155

代表 花澤廣巳

ne.jp

*zoom 配信も予定しています。ご希望の方は事前にメールでお申出ください。

アルパインスケッチクラブ

◆第34回「山好きの山の絵展」開催

この絵展は毎年2月に開催しており、今年度は第34回として開催します。50人の会員が実際に登り、見た山々を描いた作品、水彩画、油彩画、版画など約50作品とスケッチブック10点近くを展示します。

毎年山好きな方々のほか、多くの皆さんがご来場くださり、ご好評をいただいております。

会期 2月16日(日)~22日(土)10時~18時(初日は11時45分から、最終日は16時30分まで)

会場 JR有楽町駅前 東京交通

会館・2Fギャラリー 千代田区有楽町2・10・1

☎03・3215・7962

入場料 無料

*今年度はB1Fエメラルドルームにて「すがぬまみつこ」山の絵本「展」を同時開催します。

◆図書交換会のお知らせ

日時 2月1日(土)

会場 104号室ほか準備ができ次第(12時目途)入場し内覧・申込み可能です。

抽選 14時ごろに開始

問合せ 荒井正人 ☎090・7719・7855

訂正

*会報12月号(955号)19ページ

会員異動欄で、17053岡野武司様を退会と掲載いたしました

が、在籍されています。訂正してお詫び申し上げます。

*同号3ページ、「記念講演会」

GHT報告の見出しで「中村佳子

会員」とありますが、「中村三佳会

員」の誤りでした。訂正してお詫び

申し上げます。

(会報編集委員会)

◆編集後記◆

●前野深著『島はどうしてできるのか』という本を読みました。2013年に突如誕生した西之島(小笠原諸島西方)を中心に、「火山噴火と、島の誕生から消滅まで」を解説した火山学者の本です。

登山における初登頂と同じく、まだ誰も足を踏み入れていない大地がどのようにして生まれ、変化していくのか、興味深い内容でした。

●でき立てほやほやの西之島は専門家しか上陸できませんが、一般人で似たような体験ができるのは薩摩硫黄島。鹿ヶ谷事件で僧俊寛が流された昔と同じように硫黄岳が噴煙を上げ、港は鉄錆色に染まっています。東シナ海と屋久島を眺めながら東温泉の露天風呂に浸かっていると、島が生きていることを実感できました。(節田重節)

日本山岳会会報 山 956号

2025年(令和7年)1月20日発行
発行所 公益社団法人日本山岳会
〒102-0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビューハイツ四番町
TEL 東京(03)3261-4433
FAX 東京(03)3261-4441
発行者 日本山岳会会長 橋本しをり
編集人 節田重節
Eメール:jac-kaiho@jac.or.jp
印刷 株式会社 双陽社